

第 10 回お手入れと椎茸の菌打ちと栗の木などの植樹

日時：2009年3月28日（土）9：30－15：00（一般10：00－14：30）

場所：小山町 観音地

天候：曇り 気温（最高22℃ 湿度28%） 北よりの風～1m

参加者：78名 家族参加18（子供34人（、大人22人）、あすみが丘他20

特別参加：千葉市環境保全部長 和田様、千葉県山武森林研究所 石谷様

活動記録

- 9：30 準備 甘酒等
- 10：10 開会（星野）説明（奥山）
- 10：10 挨拶（小高理事長、和田部長様）
- 10：20 ○椎茸の菌打ち班 大人：子供の補助（ドリルでの穴あけ ボタ木整理）
椎茸の話 椎茸の菌打ち：子供たち中心
○苗木準備班：大人中心 植樹位置決め他（栗16本、あんず他、シラカシ1年生など）
- 11：20 休憩 甘酒 パンを焼いて食べる 懇談 第6回里山シンポジウム分科会
- 12：10 昼食 お弁当
- 13：10 写真撮影 栗などの植樹
- 14：30 作業終了片付け
- 15：00 解散

前日夜に降った雨も上がって気温も低い曇りでしたが風が弱く絶好の作業日和となりました。今回は行事全体を、第6回里山シンポジウム ワークショップと分科会として「小山町観音地 里山の森の復元 椎茸の菌打ちと栗の木を植えよう！」をテーマに「里山の森と水と森の恵み」を作業や遊びと、植樹1年後の様子を見た感想や今後の方向などを意見交換し、お祝いをしました。



小高理事長と特別参加の和田環境部長様の挨拶後、2班にわかれ、子供たちを中心に石谷さんの椎茸のお話を聞いた後、地元の方がドリルで穴あけしたボタ木に菌を一生懸命、木槌で打っていました。できたボタ木は北側斜面中間の少し平らなところに集めました。





休憩には甘酒が振るわれ、子供たちは笹に巻きつけたパンを焼いて食べました。

大人は懇談会を行いました。和田部長様から谷津田保全協定の締結の方針、会員から今後植える樹種について二次利用や植え方、手入れのポイント、子供の自然体験が出来るプレーパークの期待、赤道の付替えなどの意向について意見交換がされました



昼食後は、2手に分かれ、1班は栗の植樹、2班はアンズ・シラカシ・クヌギの苗を植えていただきました。子供たちも一輪車で堆肥を運び、穴掘り、堆肥やりなどをやってもらいました。最後に、山中さんが持ってきてくれた山中家の堆肥にいたというカブトムシの幼虫を子供たちが一つずつこの堆肥の山に移してやりました。堆肥の山にはアマガエルが何匹もいて、ここらの生き物がどんどん増えているようです。



2008 年度最後の定例行事でしたが、植樹後の木はほとんどが根付き、新しい芽を膨らませています。地元の方と都市住民の方が意見交換できてとても有意義な一日でした。

皆様 お疲れ様でした。

「里山の森と水と森の恵み」 「小山町観音地 里山の森の復元 椎茸の菌打ちと栗の木を植えよう！」

○趣旨の説明 奥山

年度末、春の農作業にお忙しい中をご参加頂きまして有難うございます。植樹後1年、谷津田保全協定も動きだしたとお聞きしており、退職間近の和田部長さまをお迎えして当地の里山の森の復元を今後どうして行くかを考える機会としてこの懇談を設けました。また、石谷さんには来週、退職後本格的にここの復元活動に加わっていただけるとの事ですので、皆様から植樹後ご感想などからうかがいたいと思います。

○和田部長から

当地は環境保全推進課長時代から、産廃計画が地元の皆さんの思いをよく汲まずに勧められたことに対して何か出来ないかと谷津田保全協定を設定したこともあり、ずっと気にかかっていたところです。谷津田保全協定は生物多様性を守るどころからきており、下の水田、斜面林のうち一部は土地所有者の方と協定を締結していただいています。この協定は開発が出来ないようにする一方、小額ではありますが平米あたり10円の助成が受けられます。このたび、小高理事長から保全協定の要望を受け、現状の保全区域である斜面林は協定書の手続き処理するのみです。残るこの大地部分は次の年度までには協定が締結出来るようにする方針です。小額といえども税金を投入するため、水源涵養林としてこのように皆様が植林して手入れしている点などを説明していく必要があります。当初は根付くのか心配しましたが、植樹後一年経ってほとんどが根付いているようです。また、多くの方がこの森作りに参加していることから、私自身は来週定年退職しますが、きちんと役所の方針として受け継がれるようにしています。今後もずっと豊かな森になっていくように生きている限り見守って時々様子を見に参加したいと思います。

○活動の報告 緑の環・協議会 奥山

昨年の植樹祭後、土地改良区と緑の環が共同で運営する森を守り育てる会として定例活動を5月から開始10回の定例活動を行った。読売新聞社の取材があり、7/7エコの潮流に掲載されました。グレーチングや門扉、小屋の金属部分が持ち去られ、手入れのときに小屋の下見に来た業者に皆が立会い「小屋・トイレ・その他全てを買い手側で処分するという証文を得て買い取ったが、10日ほどで持ち去られた。しかしこれにて業者関係はなくなりました。八月は日照り続きで水をやりました。この間に千葉県生物多様性モデル事業補助金が採択され、9月から毎月1月まで手入れと行事を行い、刈払い機3台、チェーンソー1台、カマ、ナタなど必需品を最低購入し、里山センターの指導を2回受けることが出来ました。12月には子供たち参加の行事を行い、何も無いそのままの姿が遊び場になると分かりました。それがきっかけとなり今日は多くの子供たち家族の方が参加していただくことに繋がりました。谷津田保全協定も見通しがつき、参加者が増えて土台が出来てきました。土地改良区や黙々と手入れに参加していただいている地元の方をはじめ皆さんから、4月以降、里山の森をどのように利用しながら育てていくか、お話を伺いながら進めたいと思います。

○里山の森 シイタケ栽培 石谷さん

ここには12月からミニコミ紙に掲載された行事案内を見て参加しました。子供たちが参加し、里山を皆さんが作る場所にお手伝いできればと思います。里山は元々薪炭などの燃料、落葉を堆肥として利用するためにあったものです。基本的には広葉樹林が炭用に冬場の現金を得る補助収入だった。燃料用として利用されなくなった後は椎茸の栽培でコナラ、クヌギが有用になりました。広葉樹林のうちでは落葉樹が有用です。常緑樹は全体が暗くなり下草が生えないし代謝が起りにくい。落葉樹は落葉が土を作りそこに色々な生物が関わる。微生物はもちろんですが山野草などは圧倒的に落葉樹林に多い。光の入る半年が重要です。当然、里山は手入れして利用するから保たれますので、放置するとササが繁茂し、地面が陰になると他の草や木の幼木が育たなくなるので、年間を通じて手入れが必要です。昔、埋立地の植林を行ったことがあり、ここは山の切通しよりはまだ条件がよいと思います。美しい里山は目に残ります。ここはそのような場所にできると思います。

※ 炭は利用しているのだが・・・

都市住民は水道水の汲み置きに炭を入れていく、冷蔵庫の脱臭剤、バーベキュー用に購入して使っている。花壇や家庭菜園に木酢液を利用できる。どれくらいの量が取れていくくらいなら買ってくれそうか、今後、調べていく必要がある。

○密植、宮脇方式 金井さん

世界に何千万本の植林を行ってきた宮脇昭博士という人がやっている方法ですが、その土地にあった潜在植生を一度に平米当たり3本植えるというもので20年くらいで鎮守の森のように再生が可能となり実績も多いようです。この方法の利点は、人手がかからないで森を再生できることで、反面、森は暗いものになります。また、樹種は別にして、ここでは、エリアを決めて植えたが2m×2.5m間隔で、まだまだ本数が足りないと感じている。落葉樹にしてももっと多く植えた方がよいと思うが、そうすると経済性も考えて地元の種から苗を育てて量を増やす工夫が必要です。

※ 当地周辺では潜在植生は、スダジイとされている。

「千葉市の保護上重要な野生生物—千葉市レッドリスト（2004年5月千葉市— 植物群落）」

【森林群落】

スダジイ・タブノキ群落	緑区土気町	善勝寺	A, E	良好監視	県立自然公園, 社寺林
スダジイ群落	緑区小食土町	御霊神社	A, E	やや良警戒	社寺林
コナラ・イヌシデ群落	緑区平川町	ひらかの森	E	やや良警戒	里山地区(一部)
コナラ群落	緑区小食土町	昭和の森	E, I, J	良好警戒	都市公園

※ 里山は水が大切と土地改良区がここを買い取り、森の復元に取り組んでいる。

地元の方が無償で時間を使い道具や燃料を使った上、手入れのための作業では申し訳ないと、都市住民もお手入れに参加してきたが、特に草刈や森の手入れの技術があるわけではない。県の助成により道具や研修が出来たことの意味は大きい。

○赤道付け替えと崩落の対処 小高理事長

一昨日、市の路政課にいき、赤道を脇の今あるものに付け替えるよう要望してきた。市のほうは、そのように進めることができるということで、あざみ谷津側の崩れなど周辺も含めた保全対処に工事が必要なところを市でやってもらえるようになるので進めたい。

※ 付け替え道のがけ崩れの補修に昨年度土地改良区から出費している。

本来、一旦は県保安課が赤道付け替えを含んだ違法砂利採取の是正計画を承認し、完成後の現状の姿を確認調査して完了報告をしている。その後、地元の同意がなかったことが判明してから、消滅した赤道を千葉市が確認して目印の杭を打っている。この間に赤道の所管が県から市に移管されており、その責任が非常に曖昧で、行政の曖昧な処理の後始末を地元が一生懸命してきたことになる。業者との関わりが完全になくなった現時点では、赤道は地元の同意によって「地元の人たちがこの土地を利用し守るために付替える」ことが妥当となった。

○堆肥には生き物が来る 子供の楽しみ 山中さん

今日、自宅の堆肥の中にカブトムシの幼虫がたくさんいたので持ってきたが、子供の数が多いので持ち帰るよりこの堆肥の山に子供の手で移植してもらうことにした。また様子を見に来る楽しみが出来たら良いと思う。

※ 観察だけではなくアマガエルやカブトムシの幼虫をつかんで見たり、堆肥を食べて大きくなることなどを初めて知った子供や親も多かった。植樹に不可欠な堆肥の山が生き物を集める結果となることが改めて実感できた。粹な計らいに感謝します。

○プレーパーク あすみが丘和田さん

12月に落葉のプールの行事に参加して、落ち葉の溜めた中に子供が飛び込むときに普通は危ないことか注意があるのに心配しながらも主催者が何もいわないで子供のやりたいようにやらせていたのを見て、子供の生き生きした姿や皆さんの運営に感動しました。以前から子供に自然の中で夢中になったり、ちょっと痛い思いを経験させたりしてやれないか、今の生活の中ではそれが出来ないのですが、探していたものがここにありました。子供が自然の中で体験して遊ぶところをプレーパークと言うそうで、千葉にもいくつかあり、そのうち四街道に見学にいき調べました。プレーパークは30年前にデンマークで始まりその後ヨーロッパに広がったもので、紹介した物がありますのでここでご紹介します。（別紙参照）。植林や手入れのお手伝いしながら、子供に自然体験させることが出来たら良いと思います。

※ 今のここには大きな木はないが、斜面には手入れをすれば子供でも冒険心をそそられワイルドに遊べそうな場所があり、里山は自然体験の場として「特に何もない二次自然」がある。また、手入れそのものが大人でも日常にはない時間と空間ともなる。子供にはプレーパーク、大人には癒しの森、木や生き物を育てる、興味のある視点で参加する場。子供にも頼めば、手入れ作業の一

端を一生懸命やってくれる。遊びも手入れもというのは新しい視点。

○森と水、食料、木材 まとめ 奥山

- ① 里山の森を復元する取組みの中で、下の谷津田の湧水や生き物を観察するための最低限の手入れなど併せてやるようにするなど、活動を関連付けていくことも一つです。活動団体との三者協定なども視野に入れて検討することも一案と考えられます。（森と湧水の循環を直接観察）

（和田部長）

三者協定は締結すると紙の位置づけが出来て活動のメリットがあり、この地区でも他の団体が申請しています。

- ② 行事には食べることを毎回テーマにして、すぐにはシイタケや栗も食べるまでには行かないが、食べることを通して、森の恵みを感じる場と出来たらよい。（森と森が育てた直接の食材）
- ③ これまではこのようなところが子供の遊び場ということは考えもつかなかったが、子供たちが生き生きし親御さんが喜んでくれて、手入れや植林の活動にも参加する一つの利用の仕方となる。特に何も特別に用意することなく、今後仕組みや運営を一緒に作っていく。（森で遊び体験して学ぶ）
- ④ 木材の利用は何をどう植えて育てるかに直結する課題。まずこの限定した範囲だけで考えられることとして地元の方と都市住民参加者が楽しみながら進める。また、地球環境問題などからCO₂吸収源を作る意味や消費している材の地元からの供給と購入がどこまで可能か、小さな実験なども考えられるようにしていく。（供給できる産物と地産地消）

※ 木材は森の小道の境界に使うなど、活動のためにも必要だが、生産するものを参加者が一部でも地産地消していくことなど、周辺を含めた地元の方の了解を得ながら、材の生産量や購買の仕組みを検討する。

森林や農地の利用と環境は経済的な背景から、単に環境保全するという点からはなかなか有効な手が打たれてこなかった。不況下でグリーンニューディールが報じられているが、環境を保全するためのこのような活動こそ公共的ではないか。やはり、森の恵みは何年もの長い目で考えて取り組むことが大切です。

以上